

1 学校教育目標

進んで学ぶ人 心身を鍛える人 思いやりのある人

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	<ul style="list-style-type: none"> ○確かな学力の定着を図る学校（基礎基本の定着） ○心と体を育てる学校（行事や諸活動を通して心と体力を育成） ○開かれた学校（地域との連携） ○生涯にわたる健康づくりを培うことができる学校 ○栗原小・関原小との連携を深めることで教育活動の充実をさらに図る学校
○児童・生徒像	<ul style="list-style-type: none"> ○生活習慣や家庭学習の習慣を身につけ、確かな学力をもった生徒 ○積極的にチャレンジし自分を鍛えようとする生徒 ○社会のルールを理解し、善悪の判断力・規範意識を身につけ、自信をもって大人社会に巣立って行ける生徒 ○成功だけでなく失敗や敗北からも教訓を学びとり今後に生かそうとする向上心につなげ達成感や満足感を味わうことによって相手の心を思いやることの出来る豊かな心をもった生徒 ○生涯にわたる自立的な健康づくりに積極的に取り組む生徒
○教師像	<ul style="list-style-type: none"> ○常に向上し続けようと努力を惜しまない教師 ○温かなぬくもりで子どもたちを包みながらも厳しさをもって毅然とした姿勢で指導できる教師 ○分掌等を有効に機能させながら、組織的に課題に取り組める教師 ○職務の効率化を高め能率を向上させることで限られた時間を最大限に活用できる教師 ○健康教育の意義を十分理解し実践できる教師 ○栗原小・関原小の教員と協力することで教師力をさらに伸ばせる教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

〈学校の現状〉
 コロナ禍ではあるが、全体として落ち着いて授業に取り組むことができている。多くの生徒が学校生活に意欲を持って取り組んでいる。学校評価でも生徒・保護者から学校生活に関する評価は概ね肯定的である。地域で貢献できる生徒の育成のため、近隣の事業所、地元町会や住区センターなどの理解を得て、ボランティア活動や職場体験、地域行事への協力参加を意図的に行う方針である。通常学級と特別支援学級との交流（学校行事や給食等）を図り、校内研修等を通して、生徒指導への共通理解を持った取り組みを行う努力を続けている。

また、いじめや体罰、食物アレルギー等の教育課題について、東京都から示された資料を基に校内研修で教職員全員が共通理解をした。いじめや体罰（暴言）のアンケートを実施し、生徒の気になる記述に関しては校長自ら事情聴取を行い迅速に対応する体制を整えているが、報告すべき事案は発生していない。

〈前年度の成果〉
 コロナ禍における対応により放課後補充・小中連携等については十分な取り組みはできなかった。この時期に実現可能な取り組みとして始めた単元テ

ストシステムが軌道に乗ったことは大きな成果といえる。

<課題>

- ・着実に成果が上がっているが、「読み解く力をつける時間」と「基礎学力定着の時間」（放課後補充教室）のあり方を工夫し、単元テストシステムの完成を推進することで、着実に個に応じて基礎学力の定着に引き続き取り組む必要がある。
- ・全教科において課題解決型授業を定着させ、小中の授業の連結で生徒に違和感を持たせないようにする。
- ・表現力については、区学調査目標値通過率はさほど低い値を示していないが家庭の学習では伸ばしにくい項目なので、小中連携事業を通して研究授業の検証課題として取りあげる。そして授業の中でその成果を多く取り入れ、授業改善（授業力向上）を全校体制で行う。
- ・いじめや体罰による指導を自校では絶対に起こさないよう、人権を尊重する意識と態度を生徒・教職員に持たせるような学校運営を行う必要がある。
- ・食物アレルギー事故は絶対に起こさないよう毎年年度当初に校内研修を行う必要がある。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R1	R2	R3	R4	R5
1	学力向上アクションプラン	◎	◎	◎	◎	◎
2	豊かな心の育成	○	○	○	○	○
3	健やかな身体の育成	○	○	○	○	○

5 令和3年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標正答率・通過率)		実施結果 (正答率・通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
基礎・基本の定着		令和3年度区調査通過率 65%以上 年度末到達度確認テスト正答率 65%以上		令和3年度区調査通過率 3科平均 73.3% 国語 72.3% 数学 74.4% 英語 73.1% 年度末到達度確認テスト正答率 3科平均 62.4%		区調査通過率はどの教科も通過率が70%を越え、目標を達成できた。年度末到達度確認テスト正答率は目標まであと2.6%であった。新型コロナウイルス感染症拡大防止のために授業時数が減少し、授業中に定着に必要な練習を十分にさせられなかったことが原因と考える。春休みに理解が十分でない部分の学習をさせ、定着を図る。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	朝読書 朝学習	全生徒 朝学習については 国数英	毎週火 ～金 始業前 10分	【指導体制】担任 【取り組みのねらい・目的】 毎朝、「読み解く力をつける時間」として徹底した管理の下に読書・長文の読み下しを実施することで「読みとく力の育成」を目指す。また、漢字コンテスト・英単語コンテスト・計算コンテストの準備時期には朝学習に内容を変更し、学習内容の反復練習・復習・確認を行うと共に漢字力、単語力、計算力の向上を図る。 【使用教材】各個人が所有する図書、漢字、英単語、計算等のプリント学習。丸付けは学習委員会が行い、当日中に返却	読書量統計調査を生徒アンケートと図書委員会で実施する。2か月ごとに漢字コンテスト・英単語コンテスト・計算コンテストを実施	生徒アンケートで「月二冊以上読書している」の項目で肯定的評価47.7%（前年実績）以上。図書館の貸し出し冊数が前年より増加。毎回のコンテストで、全員が正答率80%以上の結果を出す。未到達者は補習を行い合格点に届くまで繰り返し再テストを行う。	読書月2冊以上は43.1%で4.6%減少。図書貸し出し数は月500冊程度、毎日の利用者は50人程度で前年に比べ増加している。	朝読書の取組を徹底するとともに、読書の楽しさを伝える活動を図書館支援員を活用して行う。	○

2 継 続	放 課 後 補 習	<p>全学年の授業内での学習が不十分な生徒(参加させる生徒の規準は学年のねらいによって違う) 英語・数学・国語等</p> <p>第3学年に関しては入試対策の補習</p>	<p>消毒作業と並行して月～金の放課後20分程度(必要に応じて一時間近く行なうこともあり)</p>	<p>【指導体制】 学年教員全員</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】 補習時の教材はショートステップのものを各教科で用意する。放課後補習は学年全教員協力のもとに徹底した少人数指導・個別指導を行う。補習参加者は授業内での学習が不十分と判断されるメンバーとする。徹底した分析を行いポイントをおさえた弱点補強を行う。また、各コンテストで、正答率80%未到達者はこの時間に補習を行い合格点に届くまで繰り返し再テストを行う。全学年宿題提出率を向上させるため、この時間で補習を実施し完成を目指す。</p> <p>【使用教材】自作教材・授業内教材</p> <p>【改善点】対象教科の幅を数学だけに限定せず可能な範囲で拡大し、第3学年の入試対策補習に関しては、成績上位者の発展クラスの設定も可能とする。</p>	<p>補習による定着度を検証する意味合いの振り返り・再テストの実施(補習等による振り返りの定着を確認する意味合いで実施。単元テストとその振り返り、再テストに関しては後述内容を参照。)</p>	<p>2月下旬に全生徒対象で実施する年度末到達度確認テストで対象者が目標値を通過する割合や正答率が放課後補習取り組み前より全員上昇を目標とする。</p>	<p>放課後の活動が制限される期間があり、十分に実施できたとはいえない。しかし実施できる範囲で、授業中に行ったテストや各種コンテスト後の指導は、不定期ではあるが実施できた。</p>	<p>次年度は月ごとの予定にしたがって行えるよう綿密な計画をたて、実施する。</p>	△
3 新 規	I C T の 活 用	全教科	通年	<p>【取り組み内容、ねらい・目的】タブレットを活用することにより、わかりやすい授業を目指す。</p>	各教員へのアンケート	全教科・教員が月1回以上は活用する。	全教員がほぼ毎時間ICT機器を活用している。	わかりやすい授業のための活用をさらに研修する。	◎

4 継 続	サマース クール	全学年の成績下位の生徒が中心となるが発展クラスの設置も推進する(参加させる生徒の規準は学年のねらいによって違う) 英語・数学等	夏休み期間中の7日各日二時間以上	<p>【指導体制】 学年教員全員</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】 補習時の教材はショートステップのものを各教科で用意する。学年全教員協力のもとに徹底した少人数指導・個別指導を行う。補習参加者はできるだけ固定したメンバーとする。徹底した分析を行いポイントをおさえた弱点補強を行う。特に1・2年は数学特訓の時間を必ず設定する。</p> <p>【使用教材】自作教材</p> <p>【改善点】対象教科の幅を数学だけに限定せず可能な範囲で拡大(特に3年は5教科に増設実施)</p>	数学特訓に関しては、サマースクールの初日と最終日に定着の推移を見るテストを行い成果を判断する。(1年生は校長会作成の問題、2年生は自校で作成した問題)	数学特訓の最終日のテストで参加者全員の正答率の上昇を目標とする	参加者全員の正答率が上昇した。	学校全体でサマースクールを運営するようになった。その結果、学年ごとの取組のばらつきがなくなると共に、内容について教科ごとに計画できるようになった。	○
-------------	-------------	---	------------------	--	---	---------------------------------	-----------------	---	---

5 継 続	家庭学習 の習慣化	全学年 全員	随時	<p>【取り組み内容、ねらい・目的】 自学自習の習慣化を図ると共に、特に「読み解く力」「作文力」「考えをまとめる力」「英作文で書く力」を育む内容を宿題に盛り込む工夫を行う。そのため、長期休業・連休等に出した宿題の提出率を各教科で確認する。提出できない生徒に対しては、間を空けず放課後指導等で課題を終了させてから下校・部活参加とさせる。必要な学年は出した課題の確認ミニテストを実施しその成果を検証する。</p> <p>【改善点】 各学年が学年便り等で家庭学習の参考となる学習のポイントの紹介(家庭学習の手引き)を記事として掲載し、家庭学習の習慣化をさらに推進する。</p>	各担任が実施している宿題提出状況確認調査で判断する(後述する単元テスト振り返り指導の確認も含む)	全学年宿題提出率を向上させ、再提出・放課後補習での完成も含めて100%にする。	すべての学年で宿題の提出率は94%以上である。家庭学習に30分以上取り組んでいる生徒は60.0%である。	与えられた課題にはほとんどの生徒が取り組むことができる。今後、自分にとって必要な学習を選び、学べる力をつけていく。	○
-------------	--------------	-----------	----	---	--	---	--	---	---

6 継続	年度末到達度確認テストの実施	1. 2年 全員	2月下旬 もしくは 3月上旬	<p>【指導体制】 学年教員全員</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】今年度4月から2月まで行なってきた学習内容の定着の度合いをつかむため実施する。問題の印刷・後処理・結果分析作業等は学年全教員が分担して行なう。</p> <p>【使用教材】今年度の4月に実施した区調査のひとつ上の学年の問題</p>	全生徒の結果を正答率でまとめ弱点の分析を行ない今後の補習等の内容を修正することができたか判断する。	放課後補習等の取り組みの成果により、対象者が目標値を通過する割合や正答率が取り組み前より全員上昇を目標とする。正答率65%以上が目標である。	年度末到達度確認テストの正答率は3科平均 62.4% 国語 75.0% 数学 53.4% 英語 58.9%であった。	国語は正答率75%で、生徒が元々もっている基礎的な力を発揮できた結果と考える。それに対して数学、英語は目標に達しなかった。新型コロナウイルス感染症拡大防止のための措置で授業時数が減少し、学習内容が定着するために必要な練習が十分でなかったためと考える。	△
7 継続	全科・道徳指導法の工夫などを小中連携の深化により小学校教員の指導力も生かしながら、組織的に取り組むことによる教師力の向上	全学年 全員	4/21 6/30 9/29 11/17 12/15 1/19 2月上旬 3月上旬の8回を予定 (日程変更の可能性あり)	<p>【取り組み内容、ねらい・目的】栗原小・関原小・第七中の三校による合同研究実践を年間20回程度実施。全校体制で教師力向上に取り組み、進捗状況を三校で報告する。区国都の学力調査結果の推移を分析し、受験準備から学年末のプレテストまでの取組を組織的に計画して実践する。小中連携で双方の授業公開・協議会を行い双方の指導力の向上を目指す。</p>	共通のテーマに沿って小中連携を進め、研究授業を通して提案、検証を行う。全教員が指導教官となって組織的に人材育成を行う。学力向上とともに若手教員の育成につながる組織を目指す。小中連携を推進し小中双方の教員の教師力の向上を図る。	生徒アンケートで「先生の教え方がいろいろ工夫され、授業がわかりやすい」の項目で肯定的評価93.2%（前年実績）以上 全部の研究授業で「めあて・振り返り」「ICT機器の活用」を実施	「先生の教え方がいろいろ工夫され、授業がわかりやすい」への肯定的回答89.2%だが、「授業の内容をしっかりと理解できた」は92.4%である。 研究授業で「めあて・振り返り」「ICT機器の活用」はすべての研究授業で実施できた。	9年間の連続した学びを理解し、授業改善に取り組めた。	◎

8 継続	単元テスト導入のシステム化	1. 2年全員（数学・英語）	各単元終了時（時間割の調整により学年内同時刻に実施）	<p>【指導体制】 教科は数学・英語であるが学年教員全員が対応する</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】 数学・英語の単元終了時に学年同時間に単元テストを実施。基礎基本の定着が目的であるが、振り返り指導・再テストにつなげることで生徒の学習意欲の向上もねらいとしている。</p> <p>【使用教材】 教科担当が作成した各単元におけるペーパーテスト</p>	定期試験よりも短い範囲におけるテストにより準備と振り返りの取り組みやすい方法で実施し速やかに採点・返却し振り返りを実施させる。	単元テスト受験者が振り返り・再テストを通して学習意欲の向上を目標とする。また正答率が取り組み前より全員上昇を目標とする。	短い範囲のテストを実施することで生徒に基礎・基本を定着させることができた。	単元テストをさらに効果的に実施するための方法について検討、改善する。	○
9 継続	単元テスト導入に伴う振り返り指導の実施	学力の定着の度合いにかかわらず1. 2年全員の中で学習意欲が高い生徒全員	単元テスト終了後から再テストまでの間	<p>【指導体制】 教科は数学・英語であるが学年教員全員が対応する</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】 数学・英語の単元テスト終了時の放課後等に、テスト結果の振り返りを、振り返りシートにまとめ、学習における改善点をレポートしてまとめ提出（放課後補習で行うだけでなく家庭学習における取り組みも可能）</p> <p>【使用教材】 教科担当が作成した各単元における振り返りシート、レポートに関しては書式自由</p>	振り返りシート・レポートの提出により内容確認	学年全生徒の50%以上の生徒が振り返り指導に参加（学習に対する生徒集団の意欲向上と判断）	各学年65%の生徒が指導に参加	やや形式的になっている部分があるため、方法を再検討、改善する	○

10 継続	単元テスト導入に伴う再テストの実施	学力の定着の度合いにかかわらず 1. 2年全員の中で学習意欲が高い生徒全員	単元テスト振り返り指導終了後	<p>【指導体制】 教科は数学・英語であるが学年教員全員が対応する</p> <p>【取り組み内容、ねらい・目的】 数学・英語の単元振り返り指導終了時に放課後に単元再テストを実施。基礎基本の定着が目的であるが、振り返り指導・再テストにつなげることで生徒の学習意欲の向上もねらいとしている。</p> <p>【使用教材】 教科担当が作成した各単元におけるペーパーテスト</p>	単元ごとに単元再テストの実施	振り返り指導に参加した全生徒の正答率が取り組み前より全員上昇を目標とする。	再テストを受けた生徒の半数の正答率が上昇	テストへの意欲、取り組み方に課題があるため、再テストの方法について再検討、改善する。	△
----------	-------------------	--	----------------	---	----------------	---------------------------------------	----------------------	--	---

重点的な取組事項－２		豊かな心の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
心を耕す活動の推進		生徒アンケートで「思いやりを持って、友人と接するように心がけた」の項目で肯定的評価が90.1%（前年実績）以上 生徒アンケートで「学級での居心地がよく、落ち着いて生活できている」の項目で肯定的評価82.1%（前年実績）以上	「思いやりをもって、友人と接するように心がけた」93.8%。前年度から3.7%上昇 「学級での居心地がよく、落ち着いて生活できている」87.4%。前年度から5.3%上昇。	学校行事の再開などでお互いを思いやる場面を設定できた。落ち着いた生活については他の項目からも同様の結果が見とれる。	◎
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
自尊感情・自己肯定感の育成	新たな企画を各学年・各分掌1つ以上企画立案し推進する。現在進行中の企画は内容を充実させさらに深めていく。生徒アンケートで「自分のがんばりを、先生方に認められていると感じる」の項目で肯定的評価62.8%（前年実績）以上	行事を充実し、各部活動の活動をさらに活発化し、感動体験や達成感を感じる機会をさらに増やす。重点的な取組項目一三とも関連するが「健康教育」を推進し生涯にわたる自立的な健康づくりに積極的に取り組む生徒の育成を目指す。	各学年・各分掌は新たな企画を建てるのではなく、取組の見直しを行い、丁寧に取り組んだ。 「自分のがんばりを先生方に認められていると感じる」への肯定的回答は65.1%で前年度から2.3%上昇。	教育活動の各場面で生徒の良さを認め、励ます活動に取り組んできた。各活動の意義を理解し、連続する教育活動と捉えたことで肯定的回答が上昇したと考える。	◎
読書活動の充実	前年度に比べ読書量の増えた生徒の割合の増加。読書量増加のための環境整備・模様替え・掲示物の工夫を年4回以上行う。生徒アンケートで「月二冊以上読書している」の項目で肯定的評価47.7%（前年実績）以上	朝読書等の読書タイムを週50分実施。図書館支援員と連携し、読書量増加のための方策を4つ以上企画しその内容も充実させる。掲示物等を見やすく改良して図書室の環境整備を推進する。全ての昼休み・放課後に図書室を開放し読書機会を多く設定する。	「月2冊以上読書している」生徒は43.1%で前年度から4.6%減少。図書室の環境整備、図書の廃棄は着実に進んでいる。	朝読書の時間に、時間を守って読書できるように学校全体として取組を見直す。 図書室開館は、前半は昼休みのみ、夏以降は放課後も開館し、利用者は増加している。	○

特別支援学級との交流	交流活動を年間10回以上実施。生徒アンケートで「特別支援学級との交流を積極的に行った」の項目で肯定的評価21.2%（前年実績）以上	特別支援学級の生徒との授業、行事、生活等を共に行い、相互理解を深める。学校の経営姿勢の情報を具体的に発信し、保護者の理解を深めていく。	生徒アンケートで「通常学級と特別支援学級との交流を積極的に行った。」36.8%で15.6%上昇。	新型コロナウイルス感染症拡大のため、交流の機会は多くはなかったが、体育祭や委員会活動を共に行うことをとおして、理解を深めることができた。	○
------------	---	---	--	--	---

重点的な取組事項－3		健やかな身体の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
進んで健康な暮らしをする態度の育成		各取り組みの事後アンケートで体力づくり・健康教育・食育への関心が高まった生徒が90%以上	生徒からの聞き取りによる成果結果では、ほぼ全員の生徒の関心が高まった。	自らの健康について、感染防止に限らず意識を高められた。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
体力づくりの習慣の定着	発達段階に応じた指導を1～3年で実施。効率的で効果の上がる体力づくりの指導を徹底する。具体的な新たな企画を3回以上実施する。(オリンピック・パラリンピック教育含む)投力の取り組み強化を推進する。	体力向上を目指した取り組みを年間6回以上行う。特に、3年男子生徒で取り組む集団行動の取り組みを始め体育祭等で地域にも公開する。オリンピック・パラリンピック教育に関連した講演会・実技体験会や各教科内取り組みとしてのべ105回以上企画し、体力向上とオリパラ教育理解に努める。 春のスポーツテストの結果を分析し意図的な投力強化のトレーニングを実施し年度末の再計測で全学年が全国平均をこえる。	保健体育で毎時、基礎的な運動の仕方の指導を積み重ねると共に、スポーツに親しみ、楽しめる指導を行った。 オリンピック・パラリンピック講演会を実施し、日頃親しみのないフェンシングについて学ばせた。	新型コロナウイルス感染症拡大のため、保健体育の授業は授業内容及び実施の仕方について工夫が必要であったが、スポーツに親しみ、楽しもうとする気持ちを育成することはできた。	○

健康教育の推進	発達段階に応じた指導を1～3年で実施。効率的で効果の上がる健康教育の指導を徹底する。	年間指導計画に沿って、養護教諭と学級担任とのTT指導体制で発達段階に応じた指導を行う。特に、「健康保健教育授業」「歯科衛生指導」等、具体的な新たな企画を3回以上実施し生涯にわたる自立的な健康づくりに積極的に取り組む生徒の育成を目指す。	小児生活習慣病検診等に即した指導や歯科衛生指導を3回実施した。	各生徒が自身の健康について考えられるようになってきた。	○
食育の推進	食に関する取り組みを実施。食育の指導をのべ10回以上実施する。	栄養士、地域の有識者等をゲストティーチャーとし、身体づくりの基本となる栄養や食事についての指導を行う。特に、食のスタンダードに基づいた「食育授業」などを通して生涯にわたる自立的な健康づくりに積極的に取り組む生徒の育成を目指す。	前期は新型コロナウイルス感染症拡大のため、実施できなかったもので、のべ6回実施した。残菜率は令和元年度から6.5%、5.9%、4.9%と着実に減少している。	家庭科教諭と栄養士がバランスのとれた食事の大切さを継続的に指導してきた結果、残菜を減らすことができている。	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－1 学力向上アクションプラン

- 【成果】○授業に関して「理解できた」「良い雰囲気で行われていた」「充実して学ぶ楽しさを感じた」等、すべて90%以上の高い評価を得ている。
- 令和3年度区調査通過率は、3科平均73.3%で令和元年度、2年度に比べ5ポイント以上上昇した。
 - ICT機器を全教科の教員がほぼ毎時間活用できた。

【課題及び解決の方向性】

- 生徒が自らの課題を見つけ、自分にとって必要な学習を選び学べる力を付けさせる。そのために毎時の授業の振り返りをさらに充実させ、十分に理解できたこととまだ十分には理解できていないことを生徒自身が見つけ、学習の調整を図らせる。

重点的な取組事項－2 豊かな心の育成

- 【成果】○思いやりや学級での居心地、落ち着いた生活について肯定的に捉えている生徒が前年度に比べ4%程度増加した。
- 将来の職業について考えたり、希望をもったりできるようになった生徒が約6.5%増加した。

【課題及び解決の方向性】

- 自分のがんばりや活動を先生やクラスの人に認められていると感じている生徒が前年度に比べ3%程度増加しているが、さらに自己肯定感を育成するために、行事等に主体的に取り組み、お互いを認め合える場とするとともに、各学級での役割を果たすことの大切さを理解させる。

重点的な取組事項－3 健やかな身体の育成

- 【成果】○不登校生徒について、関係諸機関との連携を推進できた。
- 保護者と連携し、教育活動に取り組んでいる。

【課題及び解決の方向性】

- 不登校生徒について、学校と関係諸機関とが連携してさらに指導を進める。そのために特別支援教育委員会の活動の充実と一層の組織的対応を図る。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

生徒からのアンケートにより、学校生活の中心である授業が、大変良い状態で行われていること、また生徒が安心して登校できる学校であること、大変真面目に学校生活に取り組もうとしていることがわかりました。これも保護者の皆様、地域の皆様のご協力、ご支援の賜と感謝しております。

今年度はできる限りの学校行事を実施することで、日頃の授業では学べないことを学ばせることができました。それと同時に、普段の学校生活がきちんとできているからこそ、学校行事で力を発揮できるのだとも感じます。

七中生の良いところをもっと伸ばすために、生徒が自らの課題を見つけ、主体的に課題を解決しようとする力を付けさせたいと考えます。生徒のがんばりを認め、励ますことで、力を伸ばせる学校にして参りますので、さらなるご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

(3) その他（学校教育活動全般について）

○落ち着いた学習環境の中で、真面目に努力する生徒と指導熱心な教師によって、基礎学力が定着し、学力が向上している。また授業中に考える場面、話し合う場面、発表する場面を設けることで、自ら主体的に学ぶ姿勢、自らの学びを調整しながら粘り強く学習に取り組む態度を身に付けさせることにさらに力を入れる。

○特別支援学級を設置し、共に学校生活を送ることで、共生社会への理解を深めることができている。